

中高連携を目指した漢文読解リテラシーの開発

I. 研究の背景

古典教育における中学校・高等学校間のギャップ

中学校の学習指導要領における古典教育の目指す資質・能力として、次のことが挙げられている。

小学校での学習を踏まえ、中学校においても引き続き親しむことを重視し、その表現を味わったり、自らの表現に生かしたりすることに重点を置いて内容を構成している。各学年のアは、音読するなどして我が国の伝統的な言語文化の世界に親しむことを系統的に示している。各学年のイは、第1学年では、古典には様々な種類の作品があることを知ることを、第2学年では、古典に表れたものの見方や考え方を知ることを、第3学年では、長く親しまれている言葉や古典の一節を引用するなどして使うことを示している。

つまり、小学校からの学びの継続として「古典に親しむこと」を重視しつつ、「知って、使う」知識・技能が中学校段階では求められている。一方、高等学校における古典の取り扱いが中学校とは大きく異なる。

中学校ではそもそも「伝統的な言語文化」の事項においてしか古典は言及されない。中高の接続について、高校の必修科目「言語文化」における古典の資質・能力との繋がりは示されていない。

加えて高校では、「言語文化」のみならず、選択科目の「古典探究」は勿論のこと、「論理国語」「文学国語」においても古典を取り上げることが求められている。

そして各科目において古典に関する資質・能力の具体的な内容も多く定められており、中学校が、国語科の知識・技能35事項のうち、「古典」の語が出現する事項は6、思考・判断・表現では0なのに対し、高校では知識・技能53事項中10、思考・判断・表現では63事項中6事項で「古典」の語が見られる。他に、「本歌取りや見立てなどの特徴的な表現の技法の効果について理解する」や、「言文一致体や和漢混交文など歴史的な文体の変化について理解を深める」、直接「古典」の語の記載がない「古典探究」の8事項も含めると、106事項中24事項が古典に関する内容事項となる。

このように、高校の国語における古典の占める割合が質・量とも増大することで、学習者は「古典が難しくなった」と感じるため、古典への学習意欲の低下させているのではないかと指摘もある。

II. 中高連携を模索する

(1) 中高連携を標榜する主体性コモンルーブリック

大阪教育大学附属平野幼稚園・小学校・中学校・特別支援学校、及び附属高等学校平野校舎は、平野区内に隣接しており、5校園として連携し、共同研究を進めている。

その共同研究の成果の一つが、幼稚園から高等学校、支援学校までを包括する「主体性の育成」の観点で目標を設定する際の指標「主体性コモンルーブリック」である。

長期的な成長を想定した目標設定とその評価を可能にする、汎用性のある基本的なルーブリックであり、校園種や学習内容に合わせて具体化することができる。

このルーブリックでは、主体性を構成する資質能力を〈日常生活〉〈課題解決〉〈価値の形成〉〈協働組織形成〉〈公共意識〉の5事項に分類しており、ステージⅢが中学卒業段階、ステージⅣが高校卒業段階としている。国語科の、ことに「ものの見方」に関わる学習は、5つの事項の〈価値の形成〉に関わる。この事項のステージⅢは「自分の経験や様々な情報などをもとに、冷静に物事を捉えるものの見方・考え方を持つことができる」ことを規準としている。ステージⅣでは「学問的知識をもとに」を加え、「冷静に」を「多面的に」と設定し直している。

指標分類	指標項目	ステージⅣ	ステージⅢ	ステージⅡ	ステージⅠ
指標分類C 〈価値の形成〉に関する資質能力	指標項目C-(1) 自分のよさを認める力	自分の特性や資質、集団における役割などを認識し、それらを積極的に活かすことの意味や価値を <u>考える</u> ことができる。	自分の特性やよさを認め、他者との共通点や相違点を認識したうえで、自分自身に <u>意味や価値を見出す</u> ことができる。	自分の特性やよさに <u>気づき</u> 、肯定的に受け入れ、自分自身に <u>意味や価値を見出す</u> ことができる。	身近な人にあるままの自分を <u>出したり</u> 、認められる喜びを感じることができる。
	指標項目C-(2) 自分の見方・考え方もつことができる力	自分の経験や様々な情報、学問的知識などをもとに、対象・事象を多面的に捉えるものの見方・考え方を <u>持つ</u> ことができる。	自分の経験や様々な情報などをもとに、対象・事象を多面的に捉えるものの見方・考え方を <u>持つ</u> ことができる。	自分の経験や学んだことなどをもとに、対象・事象を捉えるものの見方・考え方を <u>持つ</u> ことができる。	自分の経験などをもとに、対象や事象を捉えるものの見方・考え方を <u>持つ</u> ことができる。

今回は古典の中でもより異文化の側面が顕著な漢文を教材とし、中・高で同じ教材を用い、主体性コモンルーブリックでコンピテンシーをはかるという、コンテンツおよびコンピテンシーベースでの中高連携を試みる。高校の学びに生きて働く、中学から高校にかけての漢文読解リテラシーの開発を目的として、大阪教育大学附属池田中学校・平野中学校と広島県立大竹高等学校で学習指導要領、コモンルーブリック、さらに、それぞれの学校の教育目標に鑑みたカリキュラムマネジメントの観点を織り込んで、同一の教材での授業を構築し比較検証した。

(2) 教材選択

用いる漢文教材は、中学校の教科書に掲載されている『論語』および高校の教科書に掲載されている『韓非子』から、『韓非子』が『論語』の逸話を引用し、儒家への批判を展開していると考えられる一節を採用することにした。

葉公語孔子曰、「吾党有直躬者。其父攘羊，而子証之。」孔子曰、「吾党之直者，異於是。父為子隱，子為父隱。直在其中矣。」（『論語』子路篇）

楚人有直躬。其父窃羊，而謁之吏。令尹曰、「殺之。」以為、「直於君，而曲於父。」執而罪之。以是觀之，夫君之直臣，父之暴子也。

魯人從君戰，三戰三北。仲尼問其故。對曰、「吾有老父，身死莫之養也。」仲尼以為孝，拳而上之。以是觀之，夫父之孝子，君之背臣也。故令尹誅而楚姦不上聞，仲尼賞而魯民易降北。

上下之利，若是其異也。而人主兼拳匹夫之行，而求致社稷之福，必不幾矣。（『韓非子』五蠹篇）

(3) 授業の実践



漢和辞典を引いて日本語訳を試みる(中学)



中学校
授業動画はこちら



法家・儒家の立場からヤングケアラー問題について議論する(中学)

中学校の実践

- 『論語』の白文のみが記載されたワークシートを配布した。『大漢和辞典』などのコピーも配付し、それをういて漢字の意味を調べ、白文を日本語訳させた。
 - 『韓非子』の一節を提示し、「直」について、「党」→「国」「攘」→「窃」「証」→「謁」と漢字が置き換えられている意図と『韓非子』に対し、孔子(儒家)の立場ならば、どのような反論ができるか考えさせた。
 - 学習者たちは『論語』と『韓非子』を完全な二項対立ではなく、それぞれ異なる次元で「直」を捉えていると見なしていた。そこで両者の考え方を対等に扱い、それらの考え方は現代においても依然として価値を持つのか、VUCAな時代の解決が困難な課題に対し、新たな示唆をもたらすのかといった課題を設定した。
- 『論語』から二十二篇、『韓非子』から十篇、訓読文と書き下し文、現代語訳を付記したものを提示し、ヤングケアラーの子どもに対して、儒家・法家はどのように問題を捉え、どのような言葉を当事者や為政者に投げかけるだろうか、一節を引用し、考えさせた。

高校の実践

- 『論語』子路篇「直躬、父を証す」と『韓非子』五蠹篇に加え、新たに『淮南子』汜論訓の訓読文を読ませた。その際、ジグソー活動で、自らが理解した教材にある「直」の定義を、互いに説明させた。
- 『韓非子』は、葉公の価値観を支援し、孔子を批判した文章であるが、孔子の立場で、韓非子に反論することはできないか考えさせた。

(4) 主体性コモンルーブリックに基づく評価

『論語』や『韓非子』を読み、無批判に受容するのではなく、自らの価値観と照らし合わせて感じる違和感や、文章同士の矛盾といったことを「冷静なもの見方」をもって発見し、ステージⅢの「この一説はこのような使い方もできるのではないか」という「多面的なもの見方」にも踏み込んだ活動を行うことができた。

III. 成果と課題

学習者Aは「『論語』は、言っていることは理想で、実際にはそのようにうまくいかないのかもしれないが、人々が、そうあってほしい、そう信じたいと思うような言葉であり、これらの言葉がきっと誰かの心の支えになったかもしれない言葉だと感じた」と述べた。この発言は、解釈とは「自分がどのように読みたいか」という恣意的なものであることを認識しながら、言葉を使い、相手に使われることで、今までの自分の中にはなかった新たなもの見方(=言葉の価値)を獲得し、古典は学習者にとって「当たり前」の道徳「古い無用な価値観」「現代と隔絶されたもの」という認識から「新たな価値を見出したり創出するもの」「現代においても活用できるもの」という認識に変容したと言える。

授業の事後アンケートでは、「あなたは古典を学ぶ意義や価値を自分なりに見出せましたか」という問いに88%の学習者が「見出せた」と回答した。